

中国三〇年代文学研究の新しい地平

絹川 浩敏

最初に、賈植芳氏の言葉から始めたい。

「一九九〇年私たち夫婦が招待されて日本を再訪したとき、当時東京大学教授、日本共産党の古くからの黨員である丸山昇氏が酒席に招待してくれたと言ったことが思いだされる。席上、彼は「中国の三〇年代左連文学は、あなた方中国人は研究するのをやめてしまいました。が、我々日本人は研究し続けています。」と言ったのだ。」（『左翼・上海』序一）

本書は、著者が長年、研究を継続してきた、一九三〇年代日本における中国人日本留学生の文学・芸術活動に対する研究のうち、国民革命挫折前後から九・一八事変勃発後までの部分である。部分と言ったのは、すでに著者は、三四年以降の中国人日本留学生の文学・芸術活動についても、『中国文芸研究会会報』にま

とめており、『上海魯迅研究』にもそれが訳載されているからである。

著者は、第一章で、黄鼎臣、夏衍、張天放、王歩文、童長栄といった、夏衍以外は、我々中国現代文学研究者にはなじみのない人物の紹介からはじめて、この国民革命挫折、四・一二クーデター前の中国人日本留学生の状況を明らかにしていく。第三期創造社同人の動きにつながつていくからである。第三期創造社の中心人物は、李初梨、馮乃超、彭康、朱鏡我、李鉄声、王学文等である。いずれもが、社会科学を志向し、多くが京都帝大文学部哲学科に在籍していた。そして、そのいずれもが、国民革命の挫折を機に急激に左傾していくのである。そして、第二章では、一九三〇年代における中国人日本留学生の活動の始まりとして、「社

小谷一郎著

一九三〇年代中国人日本留学生

文学・芸術活動史

A5判 二九二頁

汲古書院「七、三五〇円」

会科学研究会」を位置づける。「社会科学研究会」の日本語がよくできる「甲組」に黄鼎臣、廖承志、馮乃超や、童長栄らの「東京特支」（中国共産党日本特別支部〔ただしこの名は、本書に「資料」として収録されている『外事警察報』の記載〕メンバーがいた。東京特支の「外郭団体」の一つ「青年芸術家連盟」メンバーになると、我々のなじみの名前が見えてくる。許幸之、司徒慧敏、夏衍、周揚等である。そして、「青年芸術家連盟」メンバーと秋田雨雀、村山知義、藤森成吉、藤枝丈夫等の左翼文化人との交流、築地小劇場など日本の左翼演劇活動との関わりを明らかにしていく。「太陽社東京支部」にも言及している。第三章は、「日本特支」

事件である。「日本特支」事件は二九年一〇月三日に起きた、中国人日本留学生に対する最初の大規模な検挙事件である。この事件に先行する「梅龍事件」、「銀座デモ事件」などに触れながら、青年芸術家連盟などがこの時、国際文化研究所、産業労働研究所などと連絡があったことを明らかにしている。そして、この事件の影響で、太陽社東京支部は、二九年九月一日に一度会合をもっただけで瓦解してしまい、青年芸術家連盟も大きな打撃を受ける。青年芸術家連盟は、事件の中で、中心メンバーがことごとく帰国、強制送還となり、その活動を停止してしまうのである。第四章が、いよいよ「東京左連」である。「東京左連」の初期のメンバーは、任鈞、葉以群、謝冰瑩、楼適夷である。「東京左連」の成立時期をめぐっての著者の論理展開は、本書の白眉である。資料を博搜し、錯綜する回想録などを分析し、三一年六月を、東京左連結成の「原点」と結論づけている。第五章は、成立期の「東京左連」の活動を、『文芸新聞』『東京通訊』が楼適夷から任

鈞、葉以群に受け継がれていくこと、『文芸新聞』を創刊した袁殊のことについて、袁殊が訳した村山知義「最初のヨーロッパの旗」と任鈞、葉以群との関わり、袁殊と山上正義訳「阿Q正伝」との関係など「特筆に値する」ことが目白押しである。第六章は、「九・一八事変」前後の「東京左連」として、謝冰瑩の来日から、「九・一八事変」後の留学生の対応、そして、中心メンバー任鈞の回想（「九・一八事変前後、葉以群、謝冰瑩等の人々が相前後して帰国し、分盟はいつの間にか活動を停止してしまった。」）を否定して、東京左連は九・一八事変の勃発と同時にいち早く意識的、目的的な行動を起こしていたとして、第七章で、「九・一八事変」勃発後の「東京左連」の活動を論じる。第五章で、言及していた『文芸新聞』『東京通訊』が、九・一八後も継続して掲載され、それは、編者「按語」が付され、「日本の新興勢力の最近の情勢」を伝え、「反帝の認識」を促す「資料」として公然と位置づけられる。また、作家訪問記が、村山知義のものだけが『文芸新聞』に掲

載され、その後、『読書月刊』及びその副刊『婦女世界』に藤枝丈夫、窪川稲子、郭沫若、秋田雨雀などの訪問記を、主に三一年一〇月から十一月の時点で書いていることを、そしてそのもっている意味を分析している。第八章では、謝冰瑩が観た「プロレタリア詩展」、そして任鈞や葉以群から見た「プロレタリア文化連盟」の成立の意味、葉以群（本書では華蒂と表記）がコップ結成の経過を詳しく、確実に知り得る位置にいたこと、つまり彼等の東京通訊は日本のプロレタリア文学運動、文化運動を考える上で、貴重な同時代資料であることも明らかにしている。また、任鈞らが日本プロレタリア作家同盟と藤枝丈夫を通して連絡を取り合い、彼の詩が、『プロレタリア詩』三二年二、三月合併号に、謝冰瑩の「東京・プロレタリア詩展を参観して」、藤枝丈夫「原筆者についての簡単な紹介」の後に掲載され、詩集『赤い銃火』にも収録されていること、そして伏字のない「飛行機の爆音を聞いて——日本の勤労大衆に」を著者が再構成している。三一年一

中国語 結果構文の研究

—動詞連続構造の観点から—

石村 広 著

「動詞+結果補語」構造を、動詞連続構造とヴォイス体系の角度から検討。従来の理論分析に新視点を提示。 A5判 ■5800円

中国語の程度表現の 体系的な研究

時衛 国 著

現代中国語の多様な程度表現の実態を、綿密な例文分析と、体系的な観点から程度副詞を中心に追究する。 A5判 ■2520円

ことばの散歩道Ⅲ

—日中故事ことわざ雑記—

上野 恵司 著

范蠡から魯迅・毛沢東まで酷愛読書60年の著者による「ことばの楽しみ方」と日中言語文化エッセイ全76話。 四六判 ■1680円

中国語 40字で伝える日本

シャドーイング用CD-ROM付

芳沢 ひろ子・秦 燕 著

流しうめんとは？忍者は？日本のもの・こと334項目を美しくこなれた「伝わる」話し言葉で表現。 A5判 ■2310円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

一月に謝冰瑩が、年末に葉以群が、そして三二年四月に任鈞が帰国する。おわりに、胡風ら「新興文化研究会」(三二年三月下旬結成)が東京左連を引き継ぎ、三三年三月「華僑班」事件で組織が壊滅的打撃を受ける経過が述べられ、その中で、任鈞、葉以群と胡風らの活動様式の違い、二つのグループのつながりの薄さを指摘している。

本書は、一九八九年から九九年の一年間にわたり、科研費補助金を得てまとめられた研究成果報告書的な『左連研究』第一輯(八九年三月)、第二輯(九二年五月)、第三輯(九三年三月)、第五輯(九三年三月)、第四輯(九六年三月)、第五輯(九九年一〇月)に発表されたものを加筆、訂正を加

えたものである。一〇年間以上に渡る研究の成果を一〇年近くかけてまとめ直したものであり、この間、先述したその後、東京左連の研究を、二〇〇五年一月から「東京左連再建後の中国人日本留学生の文学・芸術活動について」と題して『中国文芸研究会会報』に二〇〇六年三月まで一五回にわたって連載し、その後も「東京左連再建後の中国人日本留学生が出した諸雑誌について」を二〇〇六年四月から三回連載し、二〇〇六年一月から「東京左連再建後の中国人日本留学生の文学・芸術活動について(補二)」を五回、さらに二〇〇七年五月から、「東京左連再建後の中国人日本留学生が出した諸雑誌について」の四回から八回を、二〇〇

七年一月から「東京左連再建後の中国人日本留学生の文学・芸術活動について(補二)」を三回、二〇〇八年二月から「東京左連再建後の中国人日本留学生が出した諸雑誌について」八回目を再開し、二〇〇九年五月まで一七回となっている。

著者らが『左連研究』を出し始めた九〇年代初めは、左連結成六〇周年ということもあり、『左連記念集』(一九九〇年二月)『左連論文集』(一九九一年三月)『左連研究資料集』(一九九一年一月)の三冊が出版されたが、七〇周年の二〇〇〇年は一二月に「紀念中国左翼作家連盟成立七〇周年文集」が出ただけであった。左連研究が中国では停滞したかに見えていた。しかし、評者の管見の限りでも、

孔海珠『左翼・上海 一九三四—一九三六』（二〇〇三年二月）、劉小清『紅色狂飆——左連実録』（二〇〇四年六月）、方維保『紅色意義的生成——二〇世紀中国左翼文学研究』（二〇〇四年二月）、林偉民『中国左翼文学思潮』（二〇〇五年四月）、張小紅『左連與中国共產党』（二〇〇六年一〇月）、曹清華『中国左翼文学史稿』（一九二一—一九三六）（二〇〇八年五月）、劉震『左翼文学運動的興起與上海新書業（一九二八—一九三〇）』（二〇〇八年六月）と博士論文を中心に左翼・左連を研究する業績が中国では陸続と現れた。二〇一〇年には、初めての太陽社研究の専論である趙新順『太陽社研究』（二〇一〇年九月）が出版された。劉小清は、東京左連について一節を設け葉以群、任鈞の初期から、胡風、そして後期の林煥平から丘東平まで、『東流』、『詩歌』、『雜文』までを手際よくまとめている。

著者も述べるように、中国人日本留學生の文学・芸術活動に関する研究の困難さの理由は、一次資料、関係資料の少なさであり、残された関係者の証言の異同

の多さである。著者は、多年にわたって丹念に資料を収集し、関係者の証言の異同を一つ一つ丁寧に分析し、現時点で妥当と判断される事実を指摘している。評者が考えるもう一つの研究上の困難さは、本書での謝冰瑩に代表される長い間中華人民共和国から無視されてきた作家・留學生の存在である。著者は「謝冰瑩の三十一年の来日についてはわからない部分が多い。」と述べる。だが、数少ない資料、論文をまとめ、『読書月刊』などを発掘しつつ、東京左連で謝冰瑩が果たした役割を明らかにしている。本書に触発されながら、評者は「顧鳳城」について、現在わかつていることだけを書いたことがある。顧鳳城は、汪兆銘政權に協力し、第三回大東亜文学者大会に参加した。このため、当時彼と交友関係があった人物は彼について触れたがらない。任鈞も発表雑誌を「今はまだ覚えていない」と述べるが、顧鳳城を知っていて、彼の編集していた雑誌だから「覚えていない」のではないか。意図的な記憶の欠落に思える。民国史の分野でも、留學生史研究

の分野でも、三〇年代の研究は進展を見せている。こうした成果も取り込んでいく必要がある。著者は、科研費の共同研究でも、植民地朝鮮も含めて、多様な分野との共同研究を行ってきた。

最後に、大変な作業であろうが、『中国文芸研究会会報』に発表された研究を、一日でも早く、一冊にまとめたただくことを、著者にお願ひして筆を擱きたい。（きめかわ・ひろとし 立命館大学）

■中国現代文学8

【小説】西瓜船（蘇童／金子わこ訳）北極村童話（遲子建／土屋肇子訳）養蜂場旅館（徐則臣／趙暉訳）いちめんの白い花（隆慶邦／葉紅訳）【隨筆】莊子（記憶と印象）より（史鉄生／栗山千香子訳）【本の紹介】張悅然『桜桃之遠』（立松昇二）『中国現代文学翻訳会編 ひつじ書房 A5判 一七六頁 二、一〇〇円』